指導計画の作成（イメージ図）

幼児の姿　　周囲の環境　　教師の願い

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

教育課程

教育課程に基づいて

指導計画の作成

具体的なねらい及び内容を明確に設定し、適切な環境を構成することなどにより、幼児が主体的に活動を選択・展開できるようにする

- **具体的なねらい及び内容の設定に当たって考慮する視点（ア）**
- **具体的なねらいを達成するための適切な環境の構成（イ）**

幼児の活動を理解しながら

幼児の活動の展開と教師の援助

指導の過程の評価

※「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、第２章に示すねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿

教育課程

- 教育課程に沿って園生活を長期的に見通す
- 全教職員が話し合って作成する

長期の指導計画

その時期の発達や幼稚園生活の流れなどを見通す教師の思いや願いを含ませる

↓

具体的なねらいや内容を設定する

↓

具体的なねらいや内容、季節や行事などを踏まえた環境の構成を想定する

↓

その時期の環境に関わって活動する幼児の姿の予想に基づき、教師の援助を想定する

- 長期の指導計画を基に、実際の幼児の姿に着目して具体的に作成する
- 学級担任が中心となって作成する

短期の指導計画

前週、前日の幼児の生活する姿から発達を捉える教師の思いや願いを含ませる

↓

具体的なねらいや内容を設定する

↓

具体的なねらいや内容、幼児の興味や関心などを踏まえて、具体的な環境の構成を想定する

↓

その週や日の環境に関わって活動する幼児の姿の予想に基づき、教師の具体的な援助を想定する

【指導計画の作成に当たって重視すべきこと】

- 教育課程を実施するには、幼児一人一人の発達の実情を踏まえ、具体的な指導計画を作成

- 指導計画では、それぞれの時期の幼児の発達や生活を踏まえ、その指導内容を具体化し、環境の構成や教師の援助などの指導の内容や方法を具体的に示していく

- 幼児が周囲の環境と関わりながら活動することの充実感を十分に味わえるようにするため、幼児自ら発達に必要な体験を重ねていけるようにすることが大切。そのためには、幼児の発達の理解が必要。

- 発達の理解は、日々の保育の中で、幼児の生活する姿を全体的、総合的に捉えることが大切。その一方で、発達の諸側面から捉えることも必要。

幼稚園教育要領には、生活を通して総合的な指導を行う視点であると同時に、幼児の発達を捉える視点である「ねらい」が五つの領域（健康、人間関係、環境、言葉、表現）にまとめて示されている。
幼稚園教育において育みたい資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿として、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示されている。

⇓

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に各領域のねらいを視点として分析的に捉えたり、各領域のねらいとともに「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」も併せて見ながら、自分の視点を整理して分析的に捉えたりすることも必要。

- このため、学期ごとに、あるいは年度ごとに、取りためた記録について、発達の諸側面から振り返り、幼児の発達の理解を深めていくことも必要。

【記録し、省察する】

- 保育は、一過性の現象で再現することができない。しかし、「記録を取る」ことによって、その瞬間の出来事を意識化することができる。
- 日々の遊びや生活の記録は、過去から現在へ、そして未来へと幼児の発達や学びを連続的に捉えることを可能にする。

- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は絡み合って幼児の姿としてあらわれ、その芽生えは、幼児の言動に明らかにあらわれてはいなくとも、その言動の奥では芽生えつつあるかもしれない。
- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の各項目にとらわれすぎて、幼児の姿を限定的に捉えてしまうことがあるかもしれない
- 幼児のありのままの姿を捉えることなど、これまで幼稚園教育で重視してきた幼児理解の根幹は変わらない
- しかし、記録を分析的に省察していくことで、総合的に見たときには見過ごしがちな幼児の一面にも目を向け、教師はそれについても意識化することができる

- 記録からの読み取りで重要なことは、幼児の姿を見つめ直し、幼児理解を更に進めること。記録に残された幼児の行動からその意味を考え直すことや、周囲の人やものなどの環境へのその幼児の関わり、抱えている課題、育ちつつある資質・能力などを読み取っていくこと。育ちつつある資質・能力を読み取っていく際には、記録に残された幼児の言動を、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識して読み解いていくことが考えられる。

  例：過去の幼児の記録を振り返ってみれば、１ヵ月前のあのときの幼児の姿は、今見られている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」につながる幼児の姿と関連していることに気づく場合もある。

- さらに重要なことは、教師が自身の関わりを見つめ直すこと。記録を読みながら、そのとき、教師は記録時の場面の中でどのように幼児を理解・判断し、指導や援助を行ったのか、それが適切だったのかなどを改めて考えることができる。

※　幼稚園教育において育みたい資質・能力、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿、各領域の関係についてスライド７を参照

事例を通して考えてみる

　幼児同士が話し合い、動物園に遠足に行くときのグループ名を決める活動を数日行った。初回はなかなか決まらない。Ｈ児は、他の4人の幼児と異なる意見。多数決にすると負けると分かっているので「しっくりこない」などと言っている。
　次回は、幼児なりの解決策を探している。Ｈ児も自分なりに何かしようと思い始めている。しかし、自分の意見を変えようとはしない。
　遠足が終わってもグループ名は決まらない。Ｈ児は、決めたいが、自分のこだわりを曲げない。しかし、他の幼児の思いが分かるからこそ、怒ったり、強引に決めたりしない。教師が案を出し、幼児達も賛成し納得している様子。

事例を通して考えてみる

幼児同士が話し合い、動物園に遠足に行くときのグループ名を決める活動を数日行った。初回はなかなか決まらない。H児は、他の4人の幼児と異なる意見。多数決にすると負けると分かっているので「しっくりこない」などと言っている。

次回は、幼児なりの解決策を探している。H児も自分なりに何かしようと思い始めている。しかし、自分の意見を変えようとはしない。

遠足が終わってもグループ名は決まらない。H児は、決めたいが、自分のこだわりを曲げない、しかし他の幼児の思いが分かるからこそ、怒ったり、強引に決めたりしない。教師が案を出し、幼児達も賛成し納得している様子。

５領域のねらいから考えると、例えば、

領域「人間関係」：身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい愛情や信頼感をもつ。

領域「言葉」:人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し伝え合う喜びを味わう。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から考えると、自立心、協同性、社会生活との関わり、自然との関わり・生命尊重、数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、言葉による伝え合い　　など

自立心：長い期間の話し合いだったが、自分たちで決めた、納得するまで話し合ったという経験は、達成感を味わうことにもつながったのではないでしょうか。

協同性：名前を皆で決めようという共通の目的に向け、図鑑を持ってきて友達を説得しようとしたり、スムーズに決まったグループの幼児にどうやって決めたのかを聞いたり、「にらめっこで決めたら？」などとアイディアを出したりと、問題を解決しようと工夫している。強引に決めたりしないところにグループの他の幼児の思いを大切にしようとする芽生えを感じます。

「道徳性・規範意識の芽生え」にもつながる。幼児の言動にどのような意味があるのかや、その言動には複数の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が含まれている可能性にも留意

これらを踏まえて、育まれつつある資質・能力を捉えてみると、例えば、

「知識及び技能の基礎」･･･身近な動物のことをより詳しく知ったり、文字に親しんだり、様々な言葉や表現に触れたりした。また、相談する経験を通して、皆で何かを決めていくという方法を知る機会になった。

「思考力、判断力、表現力等の基礎」･･･考えたことを言葉で伝えたり､相手の話を注意して聞いたりするなどの経験の中で、皆が納得できるように、決め方を工夫したり、情報を活用したりした。

「学びに向かう力、人間性等」･･･あきらめずに皆が納得できるまで話し合ったことで達成感をもてた